

## 学生は「国際教養」をどのように捉えているか

——「国際教養総論」の取り組みからの考察(1)——

石山 英明 高橋 一郎 田端 智美

What Do Students Understand “International Liberal Arts”?

—The Study from the Classes of “Introduction to International Liberal Arts” (1)—

Hideaki ISHIYAMA, Ichiroh TAKAHASHI and Tomomi TABATA

### はじめに

桜花学園大学保育学部国際教養こども学科はグローバルな視野を持った保育者養成を目的に掲げ、2018年度開学した。本稿は4年次科目であり、国際教養こども学科での「学びの集大成」として位置付けている科目、「国際教養総論」において、学生が「国際教養」をどのように捉えているかを明らかにする。

文部科学省は、2010年に「産学連携によるグローバル人材育成推進会議」<sup>(1)</sup>を設立した。その目的は、国際的に活躍できる「グローバル人材」を継続的に育成することと、その人材が社会で活用されることにある。

2022年10月現在、厚生労働省の「『外国人雇用状況』の届出状況まとめ」<sup>(2)</sup>に示された外国人労働者数は1,822,725人である。前年に比べると95,504人の増加があり、届出が義務化された平成19年以降、過去最高を更新している。対前年増加率は5.5%、前年の0.2%から5.3ポイントの増加であったという。外国人労働者が増加すると、保育・幼児教育が必要な多国籍の子どもが増加する。幼児教育の「質の向上」が指摘される昨今ではあるが、そこに抜本的な「質の転換」が求められる。

このような背景の中、保育者を目指す国際教養こども学科の学生が「国際教養」について何を理解し、またどのような意識を抱いているかを把握することが急務であると考え。本稿では、まず他高等教育機関における「国際教養」の捉えられ方、その授業の取り組みについて整理する。その後、国際教養こども学科開学の前身にもなっている桜花学園内の名古屋短期大学保育科専攻科留学タイプで「国際教養総論」と同一内容の授業の意図や工夫について述べる。最後に、国際教養こども学科における「国際教養総論」の授業の位置づけを示す。

(石山)

## I 国際教養とは何であるのか——他高等教育機関における取り組みの整理

### 1. 国際教養というグローバルスタンダード

真のグローバル人材の育成には、「国際教養」が必要である。筆者らが考える「国際教養」とは、「ただ単に外国語を流暢に話せることではなく、人間力を身につけること」である。なぜなら、「日本語でコミュニケーションをうまくとれない人が外国語を習得したところで、コミュニケーションが向上することはない」<sup>(3)</sup>からである。

また、筆者らが考える「人間力」とは、『『人間』のことを一番考えることができる力』のことである。経済や規則等に優先して、「人間」を第一義に捉える力である。それは、「芸術から伝統文化、歴史、政治経済に至るまでの幅広い人文系の教養」により養うことができる。人間力を備えることで、「さまざまな国や人種の違いを受け入れるしなやかさや、自分の個を確立している」<sup>(4)</sup>人間力と、コミュニケーション力が身につくと考えている。

教養は「リベラルアーツ」と訳される。リベラルアーツは古代ギリシャ時代やローマ時代に端をさかのぼる学問である。それが「中世・近世ヨーロッパでは天文学や算術、音楽、幾何学、文法法、論理学、修辞学の七つの領域」により教育され、現代になると「人文科学、自然科学、社会科学の分野にわたる実践的な知識を学ぶ」<sup>(5)</sup>ようになった。

「はじめに」で示した「産学連携によるグローバル人材育成推進会議」は、「グローバル人材」を次のように示している。「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」<sup>(6)</sup>が、グローバル人材である。ここに示される「アイデンティティ」とは、「個人が成長する過程で築き上げ、変容していくもの」<sup>(7)</sup>である。その形成過程において、「社会、文化、歴史、言語といった、日本を日本とたらしめているあらゆるものとの精神的・知的なつながり」<sup>(8)</sup>が重要とされている。

2004年に開学したAという高等教育機関がある。Aは、全学生がリベラルアーツを学んでいる単科大学である。Aは学生の多様性を重視している。そのため、「センター試験でトップの学生もいれば、特定の分野に飛び抜けた才能を持つ学生もいる。日本の高校を卒業した学生もいれば、海外で教育を受けた学生」<sup>(9)</sup>もおり、学生の相互刺激が関連である。

Aの教育制度の特徴は、次の6点にまとめられる。

- ① 国際教養教育を学ぶ、リベラルアーツカレッジ
- ② 授業はすべて英語で行う
- ③ 新生は学生寮で留学生と共同生活
- ④ 在学中、1年間の留学が義務
- ⑤ 24時間365日、勉強に集中できる学習環境
- ⑥ 春と秋に入学できる

上記の6点は、「留学や寮での共同生活を通して、学生は『個』を確立」するための教育プ

プログラムの核となっている。鈴木（2016）によると、この教育プログラムでは、『英語を学ぶ』ではなく『英語で学ぶ』、『英語の授業』ではなく『英語で授業』<sup>(10)</sup>といった、本質的で実質的な授業が展開される。これこそ、国際スタンダードの学びのスタイルだと考えられる。

Aには、卒業が難しいというチャレンジがある。卒業率は4年間で約50%である。約半数の学生が4年半や5年ぐらいかけて卒業している。鈴木は「学生たちが能動的に学ぶ環境は、教員がつくりあげるもの」<sup>(11)</sup>としている。それは、「強制的に勉強せざるを得ない環境をつくるしかない」<sup>(12)</sup>ためであると言い切っている。

こうした教育哲学は学生の「主体的な学び」とどのように繋がるのであろうか。強制されなければ、学生は学ばないのだろうか。教育者としての筆者らは、学びたいときに、学びたいことを、学びたいだけ学ぶことが、学びのグローバルスタンダードだと考えることがある。

筆者には、ドイツへの留学経験がある。その時分に、「学びによくある悲壮感」を筆者は全く感じなかった。その体感、橋爪（2021）が示す「教養」のあり方に近い。橋爪は、教養の意味を「自分のため」とし、「教養が身につけば、満足する。自信がつく。ものごとを学ぶのが楽しい。そうやって前向きに、学びを深」<sup>(13)</sup>められると述べている。さらに、その先に「一人ひとりが教養を身につけるなら、そのぶん社会がよくなる」<sup>(14)</sup>という。

橋爪は「教養は、自分の狭い範囲を超えていくために」あり、「自分の生活の狭い範囲をはみ出した、知の広がり」<sup>(15)</sup>を楽しむことが肝要とする。教養はとてつもなく幅が広い。だからこそ、俯瞰すれば教養は「ひとりの範囲で完結するものではなく、同時代のおおぜいの人びとに関心をもつ」<sup>(16)</sup>ことである。教養は、「自分を客観化し、自分と社会の関係をみつめてより正しい解決を選び取る助けになる」<sup>(17)</sup>という。

筆者は教養について、非常に漠然とした概念であると感じてきた。しかし、橋爪は「教養とは何か」という命題に対し、明確な答えを記述している。「教養とは『これまで人間が考えてきたことのすべて』」<sup>(18)</sup>だと。

橋爪は、教養を身につける目的も明示している。それは、教養が決まった目的があって、身につけるものではないとするということである。橋爪は、次のように示している。教養を身につけるには、「明確な目的意識など持たずに、広く教養に触れる」<sup>(19)</sup>しかない。「いつ役に立つのかわからないものを、いつか役立つ日のために、日ごろから少しずつ蓄積していく」<sup>(20)</sup>のが教養なのである。教養を身につけるための読書の動機も『「読みたいから読む」。本を読むことが自己目的化」<sup>(21)</sup>するという。

橋爪の述べる教養の「正しい学び方」について本章の最後に述べる。それは、「1、バランスよく学ぶ 2、『ほんもの』に触れる 3、納得して楽しむ」<sup>(22)</sup>の3条件である。

一つの分野のみに精通することは良いことだ。しかし、例えばやたら鉄道に詳しいけれど、政治がからきしわからないのでは、教養と言わない。それは、所謂「オタク」とみなされるものだ。ネット社会になって、情報はますます玉石混交となった。その中から「ほんもの」を選び取るには工夫が必要だ。学生に対して教員はそのサポートをするべきである。「ほんものに触れようと思ったら、多少の歯ごたえは覚悟しなくてはいけない」<sup>(23)</sup>。「教養に触れるのは、

まず、楽しいから。楽しいから学んでいるうちに、結果的に、答えのない問題に自分なりの答えを出す準備が整う<sup>(24)</sup>ことになる。

こうした橋爪の考えに従えば、「学びの土台」がしっかりしてくる。堅固な学びの土台の上で学生は喜びと楽しみを携え、「学びの大航海」に一歩踏み出す。筆者らはそう考えているのである。

## 2. 他高等教育機関における国際教養

ここでは、国際教養を謳う他の高等教育機関における「国際教養」学修構想と実際について整理したい。

### (1) 国公立大学Bの事例——「国際日本学」としての国際教養

Bは、2016（平成28）年4月1日に「国際教養学部」をスタートさせた国公立大学である。定員は90名である。「少数の学生を対象に、テラーメイド教育と海外留学で『新国際人』を養成すること」を目標としている。それは、「これまでの、既存の価値観にとらわれず、自由に、主体的に、広い世界と未来に役立つ、新たな価値観を創造することで、世界の課題を日本の力で解決する人材を育成するとともに、文系や理系という既存の学問を飛び越えて未来を創る学部でありたい」という考えから成り立つものである。

Bが目指す「日本が持つ力を新たな価値あるものとして世界に発信し続けることのできるグローバル人材育成」に、一つの「国際人」のありかたが示されている。それは、「日本が持つ力を新たな価値あるものとして世界に発信し続けること」ができる人材であるということである。

「日本の価値の捉え直し」を行いつつ、「既存の価値観にとらわれず自由に、そして主体的に物事に取り組む『個』の力を育てる」。これらが今後、グローバル社会に求められる使命であるとBは構想している。興味深いのは、学の「混合」という考え方である。それは、「現代社会が直面する複雑な問題に対応する」ことができる問題解決力の養成が目的とされている。具体的には、「俯瞰的な視野」を持つことと、「さまざまな学問分野を横断しながら、幅広い知識やアイデアを駆使して解決」する力の醸成である<sup>(25)</sup>。

Bの国際教養学部は、2012（平成24）年より開始された「国際日本学」に発端する。それは、「グローバル人材を目指す学生に対して、日本を学び日本を世界に発信できる能力を身につけるためのプログラム」である。国際日本学は、①日本を海外に発信できる知識の獲得プログラム、②英語によるコミュニケーション・プログラム、③短期留学、④インターンシップなどのグローバル実践プログラムにより構成されている。

これらの四つの学修の柱が、国際教養学科では、①俯瞰科目（基礎教養科目）、②スキル形成科目（語学と研究手法の学修）、③フィールド科目・ワールド科目（現場での実践型学修プログラム）、④専門科目となっている。この①から③までの科目が、「新しい教養教育の試み」だとされている。

3年生以上で履修する専門科目群は、「国際」「日本」「科学」で構成されている。具体的には、以下のように示されている。

- ① 「国際」に関するグローバルスタディーズメジャー科目  
：地球規模の諸課題を多角的に探索
- ② 「日本」に関する現代日本学メジャー科目  
：現代日本の文化・社会・科学技術から課題解決方法を探求・発信
- ③ 「科学」に関する総合科学メジャー科目  
：文理混合の科学実践・サイエンスコミュニケーションを通じた課題解決を推進

Bでは、「国際教養学部はパイロット学部である」とされている。B大学のグローバル化を切り開いていくための多様な「試行（パイロット）」を行える学部であり、グローバル化を目指すとして示されている<sup>(26)</sup>。

こうしたB大学における「専門性」を図る基準は表1のように示されている。最終的な到達目標は最後の transdisciplinary である。transdisciplinary とは、「いわゆる学界を超えた社会との協働過程を通じた、社会のための学知の構築」である。それは、「国際社会のそれぞれの課題がなぜ複雑に見えるかを考えてもらい、これらの課題を解決しようとしているプロジェクトを一步引いて、評価できるような教育」というアプローチから成立している<sup>(27)</sup>。表1から考えられる transdisciplinary の「専門性」は、学生自身が「自分の研究テーマ」を持ち、複数の学問的知識を基にした学際的理解から「自分なりの学問的視点」を持つことである。そこから、「いわゆる学界を超えた社会との協働過程を通じた、社会のための学知の構築」が目指されているといえる<sup>(28)</sup>。

表1 国際教養学部生が申請する留学プログラムの「専門性」を図る基準

[intradisciplinary]	そのプログラムで獲得が期待される言語知識・文化理解に関してあらゆる側面から考えられるようになっているか。また、その後の学業および職業においてその多面的考え方を活かそうとしているか。
[multidisciplinary]	そのプログラムで獲得が期待される言語知識・文化理解を一つ以上の学問の視点から考えられるようになっているか。また、その後の学業および職業においてその学際性を活かそうとしているか。
[crossdisciplinary]	そのプログラムで獲得が期待される特定のテーマに関する知識や理解を一つ以上の学問の視点から考えられるようになっているか。また、その後の学業および職業においてその学際性を活かそうとしているか。
[interdisciplinary]	そのプログラムで獲得が期待される実践知識や理解を多数の学問の視点を使って深められるようになっているか。また、その学際性をその後の学業および職業において活かそうとしているか。
[transdisciplinary]	そのプログラムで獲得が期待される研究テーマに対する学際的理解を越え、自分なりの学問的視点を持つようになっているか。また、その学際性をその後の学業および職業において活かそうとしているか。

出典：ガイタニディス・ヤニス, 2020, 『『国際教養学』とは何か?—千葉大学国際教養学部での4年間の総括—』『千葉大学国際教養学研究』第4号, p. 202



## (2) 私立大学Cの事例——リベラルアーツ教育と専門教育の両立としての国際的教養

Cは、2015（平成27）年に「国際教養学部」をスタートさせた私立大学である。定員は130名である。伊東ら（2021）はCを事例として、「高等教育機関に対する現実的・短期的な専門教育への期待と、人間形成としてのリベラルアーツ教育とを両立させる教育のあり方を検討」している。その方法として、「学部教員有志が、それぞれの専門分野（社会学、キャリア発達、異文化コミュニケーション論、翻訳学、応用言語学、公衆衛生学）の視点から国際的教養の構築に向けた課題や教授法について、リベラルアーツ教育の意義や実践例を紹介しつつ、探索的に検討する」ことが示されている。その議論は、「研究者自身がリベラルアーツ主義に立脚した意識を強化していくために行うべき」としていることから、Cにおける国際的教養は、「リベラルアーツ教育」を軸として考えられているといえる<sup>(29)</sup>。

伊東らによる「リベラルアーツ教育」への姿勢として興味深いのは、「リベラルアーツ教育においては、必ずしも『唯一の正解』は重視しえない」という視点である。「多層的な専門知を介した思考のプロセスそのもの」が「答え」であり、「学生や教員の活発なディスカッション」それ自体が、リベラルアーツ教育における「答え」だと伊東らは示している。

伊東らの論考は、「学部において、日々の実践の中から見えてくる経験値を踏まえつつ、今後の国際的教養のあり方について、さらに綿密な検証と、それに基づいての将来的プランの策定に向けての第1段階」であるとされる。教員相互が共通に持つ見解は、「専門領域が異なる研究・教育の実践者および関係者が、共通して人間形成としてのリベラルアーツ教育を日々の専門教育の実践の中で継続的に行っている」というものである。そして、その「継続を実現させるための研究・教育の実践者の日々の姿勢こそが、リベラルアーツ教育と専門教育の両立の要」だとしている<sup>(30)</sup>。

伊東らの提示する「リベラルアーツ教育」は、「活発なディスカッション」と「人間形成」の継続に資するものとして捉えられているといえそうである。 (石山)

## II 国際教養こども学科における「国際教養総論」

### 1. 国際教養こども学科について

本学科は、2018年に設置された学科である。今日の日本においてグローバルな視点を持った保育者として活躍するために、保育の学びと共に国際教養を身につけることを目標に設置された学科である。

国際教養を学ぶために、大学の4年間で、短期留学（1年次・2週間ニュージーランド）と長期留学（3年次・11ヶ月オーストラリア）を課している。なおオーストラリア留学では、オーストラリア保育士資格（Certificate III in Early childhood Education and Care）を取得する。

留学では、保育の学びだけでなく、自ら課題を見つけ出し論理的思考力を身につけることを課している。学生は、留学を通して保育の学びと共に、幅広い国際教養を身につけ、国際社会における共通性や差について理解し見識を得ている。留学中に得た国際教養を各自が発表する

科目として「国際教養総論」がある。

(田端)

## 2. 「国際教養総論」の科目設置の背景

前項ではカリキュラムの中における教務上の位置づけも含めた本科目の説明を行った。本項ではより詳細に本科目の設置の背景と留学との関連、この科目の経緯と発展について記したい。留学プログラムに合わせて設定された本科目には次のような狙いがある。

- ① 海外生活で得た幅広い視野
- ② 国内では経験できない様々な場面での対応力、発言力
- ③ それらを背景に自らの興味、問題提起を展開する発展力

これら3点を取りまとめ、表現する場として本科目を設定した。卒業研究(卒論)が書く事によって自ら調べたことを展開、表現するのに対して、本科目では発言・発表すること、それも学生自身のトピック選択によって行われることを通して4年間の学びのまとめとする意味合いを持たせた。「卒論の口頭版」的な位置づけであった。

自らの意志、自らの発信、発言を行わなければ生活できない留学生活は、否応なしにその学生の行動に対する自主判断力と自己発信力が強まる。それは国内で普通に生活しては得られないものである。なぜなら日本国内においては、社会整備が進み、不具合のない社会が構築され、「理不尽な日常」が跋扈する社会ではなくなった。

他方、海外生活においては日本国内と同じようには行かない。時には差別感、不公平感等を感じることも少なくない。それを乗り越えて人間として一回り大きくなるにあたってのポイントとして、「耐性」があげられる。長年の留学指導で、この耐性を経ての留学生活に留学者の成長が見られ、それに基づいて社会に対する感性と価値観も変化してきた。そうした変化は学生自身は気がついていない場合も多い。それを自らが主宰して授業を展開する場を経て、自らの成長した人間力を確認する場所にもしてほしい。そうした願いが本科目に内包されている。

国際教養こども学科の成り立ちは、前身の名古屋短期大学専攻科保育専攻の留学タイプをその源としている。専攻科においても同様の科目を設置し、渡航前と後で、明らかに問題意識や発言力に変化(成長)が見られた。これはアンケートを通して成長を可視化することができた。国際教養こども学科でもこれを踏襲する意味からも同じ授業形態の科目を設置するに至った。

(高橋)

## 3. 国際教養こども学科における国際教養総論

### (1) 国際教養科目の学修指標

国際教養こども学科のカリキュラムにおいて、専門教育科目の中に、こども教育科目(保育士・幼稚園免許に関わる科目)と国際教養科目・実習科目・演習科目(卒業研究等)がある。

国際教養科目の学修指標(DP)は以下の5点である。

- ① 国際社会で活躍するために必要な幅広い視野と知識と教養
- ② 各国の保育の比較を通して身につく望ましい保育のあり方について考察する力

- ③ 国内外の実習と卒業研究に取り組むことで身につく、課題を見出し解決する力と論理的思考力
- ④ 多文化共生社会に生きる子どもと保護者の支援を行うのに必要な異文化受容能力
- ⑤ グローバル試合に対応できる日本語及び英語を中心とする外国語による高いコミュニケーション能力を身につけること。

これらの指標を達成するために、学生には、諸外国に関する幅広い視野と教養を持ち、国際社会において活躍できる能力を持つことを求めている。ここで本学と既存の国際教養と異なる点として構想されているのが、保育を通してその教養を修得する点である。

保育・幼児教育の対象・歴史・現状・制度・内容・方法を理解し、日本と諸外国との比較を通して自分の考えを持ち、これからの保育・幼児教育の理想を思い描くことによって、保育・教育に限らない国際教養を身につけている。これについては、国外（オーストラリアやニュージーランド）の保育実習に取り組んでいることが大きく関わっている。学生は、実習を通して、グローバルおよびローカルな視点における課題を見出し、根拠を持って論理的に考察し、その課題を解決することに試みている。

また、オーストラリアやニュージーランドの多文化共生社会における保育・幼児教育・保護者支援について理解し、文化の共通性や差について受容するに至っている。こうした経験から、学生は国際教養を身につけ、自らの課題を見出し解決する論理的思考力を養っている。

国際教養科目においては17科目を用意している。そのうち、「国際教養総論」は、この国際教養科目の中の4年生科目として、いわばまとめ科目として位置付けている。また「国際教養総論」では、留学中に得た国際教養を各自が発表し、それについて議論をするという形をとっている。発表内容については多彩でユニークなものも多く、幅広い国際教養を身につけてきたことが窺える。

## (2) 国際教養総論の授業概論

国際教養総論の授業では、留学で得た幅広い知識と視野、そして言語力アップにともなう対外的発言力の向上を基本として、各学生1回の授業内発表を行う。学生は社会時事全般及び国際情勢から日常の事象まで自由にトピックを選ぶことができ、それを基に討論、意見交換、提議などが行われ、その内容や進め方は発表する学生がコントロール（司会）する。

授業の到達目標は、次のように設定している。学生は授業を通して、社会に対する自らの興味を確認するとともに、その興味を自らの言葉によりクラス内で発表する。発表することで、自らの発信力を確立できるものとすると考えているためである。発表内容については、表2に示した内容のうち、学生が自らの選択でトピックを決めて発表することとしている。また、授業の展開をコントロールすることを通して、留学で得た対外的な発言力を確認している。発表と授業のコントロールへの責任を各学生が負うことが、留学の事後指導の要である。

表2は、シラバスに示している発表テーマである。学生自身の選択による発表は、学生自身の多彩な社会時事・事象をベースに錬成されたものである。学生による各々の発表内容を契機



に、授業内で積極的な発言や意見交換が行われた。

表2 学生にシラバスで提示している発表テーマ

家族と家庭	笑いとユーモア	法律と道徳	公害と産業
学歴競争社会平等	危機管理	親友友情	戦争と平和
契約	愛情恋愛	勤労職業	奉仕ボランティア
公共性と倫理	ネット社会		

(田端)

## おわりに

この論文を仕上げている現在、筆者らは国際教養こども学科1年生の「海外保育フィールドスタディ(2週間)」の引率でニュージーランドに滞在している。このプログラムは、ニュージーランドの保育や文化を学ぶと同時に、3年次の「海外保育資格プログラム(約1年)」に向けて海外生活を体験する重要な意味を持っている。

ニュージーランドで生活すると、この国の興味深さを毎日感じるようになった。ラウンドアバウトのロータリー交差点や、信号前に道路に埋め込まれている車重センサー、自然と一体となった生活、多文化共生の工夫などである。人々は懸命に考え、同時に生活を楽しむ。生活の余裕や、様々な考えが同時に存在することを認める姿勢から教養が生まれると、筆者らは確信している。

次稿では、「国際教養総論」を受講した学生のアンケート結果から、学生が選んだテーマを示しながら、学生が「国際教養」をどのように捉えているかについて考察を深める。(石山)

## 謝辞

この原稿をまとめるにあたり、嶋守さやか先生に多大なるお力添えをいただいた。心からの謝意をここに表したい。

## 註

- (1) [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/shitu/sangaku/1301460.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shitu/sangaku/1301460.htm) (情報取得日: 2023/09/09)
- (2) [https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_30367.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_30367.html) (情報取得日: 2023/09/09)
- (3) 鈴木典比古, 2016, なぜ国際教養大学はすごいのか—トップが語る世界標準の大学教育論—, PHP新書, p. 17
- (4) 同上, p. 4
- (5) 同上, p. 5
- (6) 前掲(1)

- (7) 前掲(3)
- (8) 同上
- (9) 同上, p. 87
- (10) 同上, p. 99
- (11) 同上, p. 170
- (12) 同上, p. 166
- (13) 橋爪大三郎, 2021, 人間にとって教養とは何か, SB新書, p. 4
- (14) 同上, p. 4
- (15) 同上, p. 22
- (16) 同上, p. 23
- (17) 同上, p. 23
- (18) 同上, p. 61
- (19) 同上, p. 64
- (20) 同上, p. 64
- (21) 同上, p. 143
- (22) 同上, p. 237
- (23) 同上, p. 243
- (24) 同上, p. 245
- (25) 渡邊誠, 2016, 千葉大学の事例—国際教養学部—, 現代の高等教育, (581), p. 21
- (26) 同上, p. 24
- (27) ガイタニデイス・ヤニス, 2021, 国際教養学という専門における卒論と指導—千葉大学を事例に—, 千葉大学国際教養学研究, 5, pp. 187-188
- (28) ガイタニデイス・ヤニス, 2020, 「国際教養学」とは何か?—千葉大学国際教養学部での4年間の総括—, 千葉大学国際教養学研究, 4, p. 202
- (29) 伊東達彦ら, 2021, 国際的教養の構築に向けて, 順天堂グローバル教養論集, 6, p. 138
- (30) 同上, p. 143

## 文献一覧

- 伊東達彦ら, 2021, 国際的教養の構築に向けて, 順天堂グローバル教養論集, 6, pp. 137-145
- ガイタニデイス・ヤニス, 2020, 「国際教養学」とは何か?—千葉大学国際教養学部での4年間の総括—, 千葉大学国際教養学研究, 4, pp. 195-207
- ガイタニデイス・ヤニス, 2021, 国際教養学という専門における卒論と指導—千葉大学を事例に—, 千葉大学国際教養学研究, 5, pp. 177-192
- 鈴木典比古, 2016, なぜ, 国際教養大学はすごいのか トップが語る世界標準の大学教育論, PHP新書
- 橋爪大三郎, 2021, 人間にとって教養とは何か, SB新書
- 渡邊誠, 2016, 千葉大学の事例—国際教養学部—, 現代の高等教育, (581), pp. 21-24

(受理日 2023年9月12日)